

第16回世界新体操選手権大会における団体演技の分析

——なわとボールの演技構成——

小 林 由 美 子

I 研究目的

第16回世界新体操選手権大会には、旧ソ連の崩壊後初の国際大会として旧ソ連から8ヶ国（ロシア・ウクライナ・ベラルーシ・リトアニア・エストニア・ラトビア・スロベニア・グルジア）の参加があった。この大会の団体総合優勝は、ロシアであり、ウクライナが5位に入り、旧ソ連の強さを再認識した。また、長い間優勝を確保していたブルガリアは、手具の破損による差し替えなどで大きな減点があり第19位と低迷した。今回第2位のスペインは一昨年のギリシャ大会では初優勝しており、1986年頃から3位4位に位置し、力をつけてきている。日本は1983年の第1回ワールドカップで第3位を収めて以来、4位5位の成績を収めていたが、今回は大きなミスがなかったにもかかわらず第9位という過去最低の成績に終わった。新体操の採点規則が毎年のように改正され、現在の選手たちに課される要素は多大である。このような状況の中で、日本の置かれた立場は大変難しくなっている。日本選手の能力は年々向上しているが、ヨーロッパ諸国の選手も同様に、能力・技術共に伸びてきているのが現状である。日本の国体競技が復活するためにはこれから何をしなければならぬのであろうか。団体演技の構成について、現在上位に位置するチームを分析し、今後の日本の団体構成の為に役立たせようとするものである。

II 研究方法

1992年に行なわれた第16回世界新体操選手権大会（ベルギー）のビデオフィルムをもとにしてブルガリア・スペイン・ロシアの3ヶ国に焦点をあて、下記の項目について分析を行なった。

- (1) フォーメーションについて
- (2) 手具交換について
- (3) 独創性 (Originality) とリスク (Risk) について

Ⅲ 分析結果及び考察

演技分析にあたり、団体演技の構成の得点配分を表1に示した。

表1 団体演技の構成の得点配分

A 技術的価値 多様性：音楽と動きの関係		最高9.50点
1. 構成の技術的価値： 難度の数と価値，交換の数と価値，フォーメーションの数，技術的要求（徒手及び手具）の存在，徒手及び手具のすべての要素の使用，右手と左手の使用の均衡，演技中の難度と交換の配分，難度要素と交換それぞれの論理的な関連性，演技面の使用 2. 多様性 難度において，交換において，フォーメーションにおいて，移動において，ダイナミズムにおいて，空間使用において 3. 音楽と動きの関係： 音楽の選択：音楽的構成の統一と明確さ 伴奏音楽と演技構成の関係：音楽と動きの性格及び構造の一致，動きのダイナミズムの対比と音楽のそれとの一致，強弱の変化の一致		
B ボーナス		最高0.50点
1. 独創性：(Originality) (最高0.30点) 新しい難度，新しい難度のコンビネーション，新しいフォーメーション，新しい選手の連携 2. リスク (Risk) (最高0.20点) 手具操作において，交換において，相手の選手との関係において，移動において		
A 9.5 + B 0.5 = 10点満点		

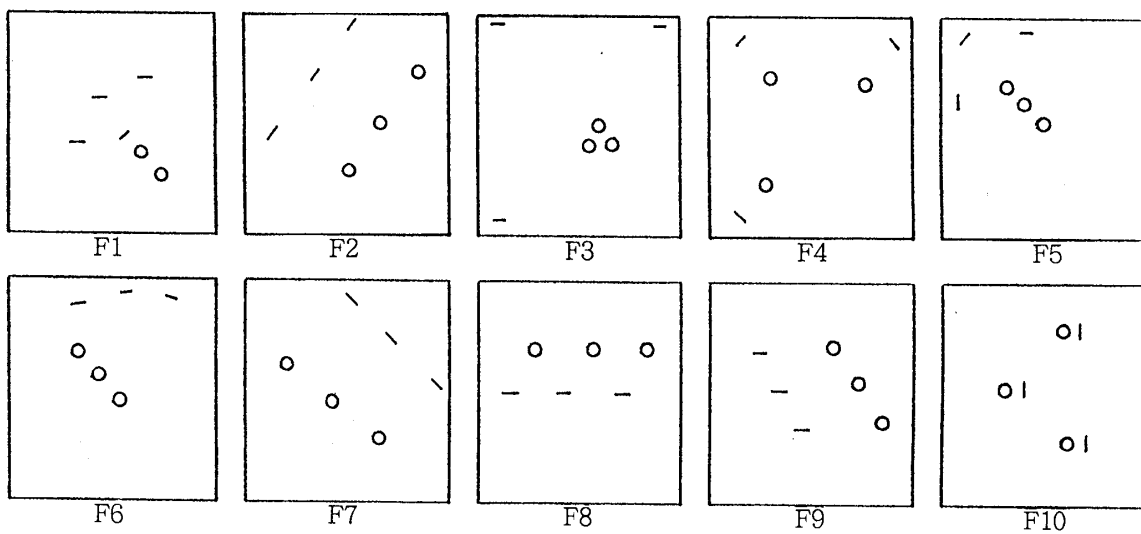
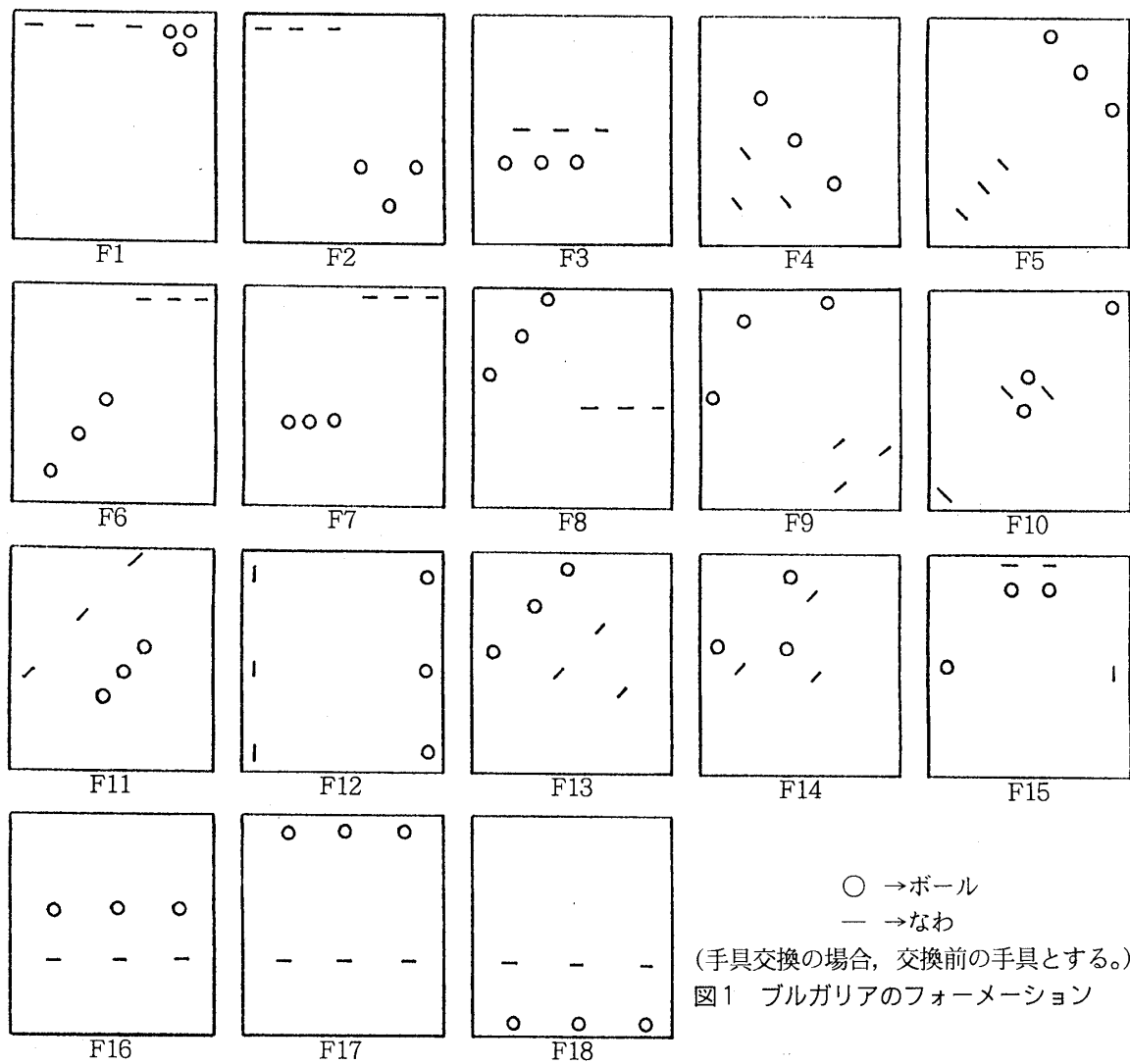
参考までに、過去の8年間のうち実施された7年の団体総合順位を表2に示す。

表2 世界新体操選手権大会・ワールドカップの団体総合順位

年	大会名(開催地)	参加数	優勝	2位	3位	4位	5位	6位
1985	第12回世界新体操選手権大会 (スペイン)	21	ブルガリア	ソ連	朝鮮民主主義共和国	中国	東ドイツ	日本
1986	第2回ワールドカップ (東京)	8	ブルガリア	ソ連	朝鮮民主主義共和国	スウェーデン	日本	中国
1987	第13回世界新体操選手権大会 (ブルガリア)	20	ブルガリア	ソ連	中国	スウェーデン	日本	イタリア
1988	なし							
1989	第14回世界新体操選手権大会 (ユーゴスラビア)	22	ブルガリア	ソ連	スウェーデン	中国	ギリシャ	日本
1990	第3回ワールドカップ (ベルギー)	6	ソ連	ブルガリア	スウェーデン	日本	ギリシャ	中国
1991	第15回世界新体操選手権大会 (ギリシャ)	18	スウェーデン	ソ連	朝鮮民主主義共和国	ブルガリア	ギリシャ	日本
1992	第16回世界新体操選手権大会 (ベルギー)	21	ロシア	スウェーデン	朝鮮民主主義共和国	イタリア	ウクライナ	中国(9位日本)

(1) フォーメーションについて

各国のフォーメーションを図1～図3に示した。



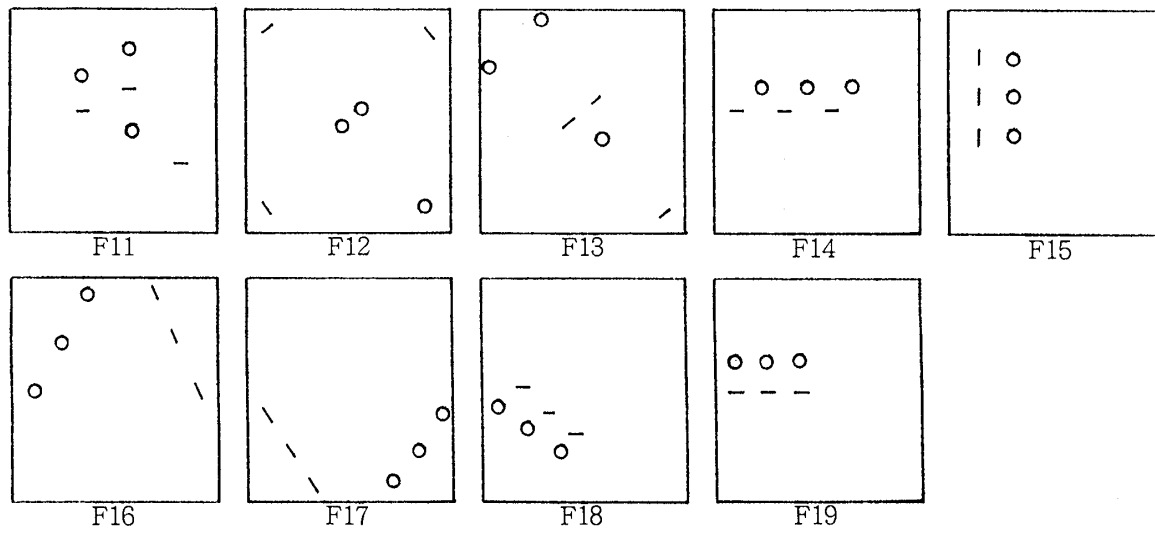


図2 スペインのフォーメーション

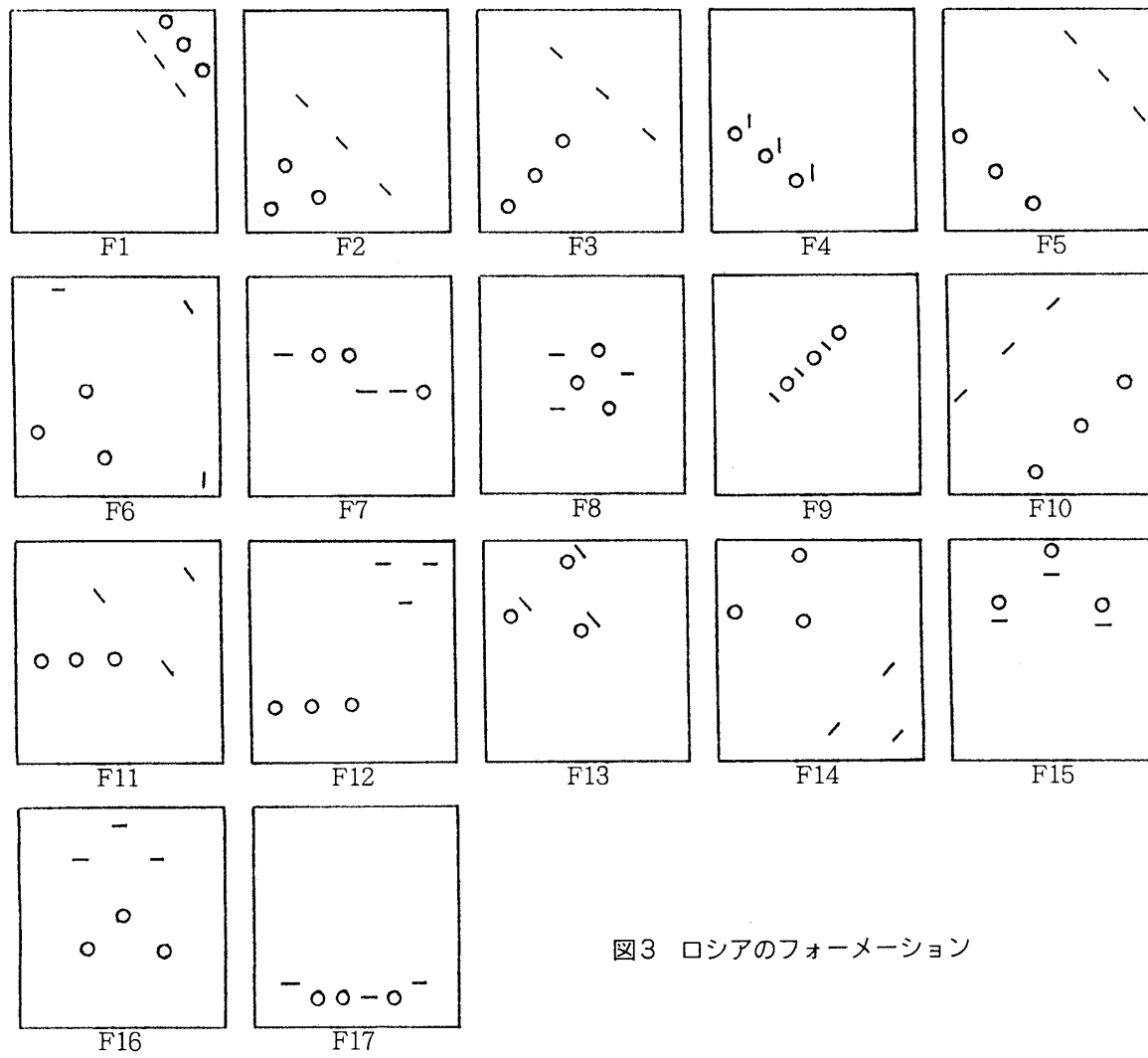
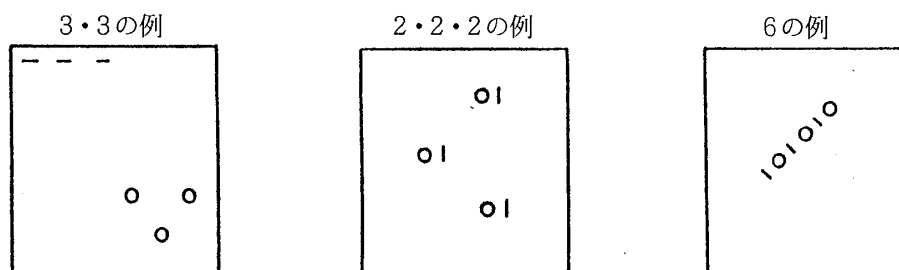


図3 ロシアのフォーメーション

次にフォーメーションの種類と回数及び演技時間を表3に示した。

表3 フォーメーションの種類と回数及び演技時間

国名 \ 種類	3・3	2・2・2	6	その他	合 計	演技時間
ブルガリア	13回	2回	1回	2回	18回	2分21秒
スペイン	9回	6回	2回	2回	19回	2分23秒
ロシア	10回	3回	3回	1回	17回	2分15秒



フォーメーションの変化は最低6回以上行なわなければならない」とされている。各国共にフォーメーションの変化は17回以上であった。種類は3・3が最も多く各国共に過半数を占めている。今回のこの団体演技の組み合わせとしてなわ3ボール3という関係からこの組み合わせが多い傾向が見られた。2・2・2の組み合わせはスペインが最も多く、2人組の運動として多く取り入れていた。フォーメーション（以下Fとする）10.F14.F15.F18.F19などがそうである。ロシアのF7.F8.F9は集団や小さな1列などであり、前後の大きなフォーメーションF6やF10との違いが見られ、演技全体のアクセントになっている。ブルガリアは3・3が多くF3以外は大きく広がったフォーメーションが演技の大部分を占めていた。

(2) 手具交換について

団体演技には「最低4個の手具交換による難度を含み、そのうち2個は高級難度でなければならない」とされている。

各国の手具交換の回数と、その方法及び難度レベルを表4に示した。

手具交換は各国共に難度として判断されたのが最低数の4回であった。難度のレベルはブルガリアとロシアが中級難度1回、高級難度3回であり、スペインは中級難度2回高級難度2回であった。スペインにおいてはこれらの他に数回の交換が行なわれていたが、難度に属する交換はなかった。ブルガリアはボールの交換方法が一般的な前方・後方投げが多かったがなわの方法（交換1交換3交換4）において工夫が見られた。なわの操作後、目にも止まらぬ速さでなわを前方に投げる（交換1）や、なわを足にひっかけ身体に巻きつけたものを後方に投げる（交換3）などである。スペインはボールの受け方に他には見られないようなものがあつた。腹這いになり背中と腕を使って受ける（交換3）、背中でボールをバウンドさせて受ける（交換4）など独創性につながるものである。ボールの操作としては、体前において手の平で受けるというのが一般的であるが、どの国においても腕以外を使った演技が多くなってきている。背中を使うのは珍しいものであり視野外ということから難しい演技である。ロシアは交換の全てが、相手との距離6m以上という大きな交換で占められている。なわの方法として前方投げ、1本後方投げ、足投げであり多様性があつたが、ボールの方法が前方投げのみであった。受け方においては、なわボール共に脚の間から受けるものが多かった。

表4 手具交換の回数とその方法及び難度レベル

国名	回数	フォーメーション	手 具 交 換 の 方 法		距 離	難 度 レ ベ ル
			な わ	ボ ー ル		
ブルガリア	4回	1 F5	操作後、前方に投げる 投げの間もぐり回転1回	前方に投げる 脚で受ける	6m以上	S
		2 F10	前方に投げる	前方に投げる	6m以上	S
		3 F12	なわを足にひっかけ身体に巻きつけたものを後方に投げる	前方に投げる 両足首にはさんで受ける	6m以上	S
		4 F14	なわを両足で張り相手に渡す	後方に投げる。脚で受ける	なし	M
スペイン	4回	1 F4	前方に投げる	腹這いになり両脚にボールをのせ、両腕支持で全身を押し上げるとともにボールも押し上げる	なわ 6m以上 ボール 2m以上	M
		2 F7	ソーステップとともになわを投げ前後開脚ジャンプで相手を跳び越える横転してなわを受ける	腹這いになり両脚にボールをはさみ跳ね返して小さく投げる 相手からきたボールを受けた直後投げ、前転して受ける	なし	S
		3 F9	前方に投げる もぐり回転してなわを受ける	前方に投げる 腹這いになり腕と背中ではボールを受ける	6m以上	S
		4 F15	前方に投げる シェネターン前転してなわを受ける	後方に投げる シェネターンしてボールを背中で跳ね返して受ける	2m以上	M
ロシア	4回	1 F5	前方に投げる もぐり回転してなわを受ける	前方に投げる 座位になり腰の後ろでボールを受ける	6m以上	M
		2 F6	1本の形で後方に投げる なわの持ち手の一方を受けもう一方を脚の間から受けMGキック	前方に投げる ボールを受けながらMGキック	6m以上	S
		3 F10	足になわをかけ、もぐり回転で投げる。なわの持ち手の一方を受けもう一方を脚の間から受け座位になる	前方に投げる 座位になりボールを脚の間で受ける	6m以上	S
		4 F14	前方に投げる 脚の間から手を出して受ける	前方に投げる バウンドしたボールを脚の間から腰と両腕で受ける	6m以上	S

S - 高級難度 M - 中級難度

(3) 独創性 (Originality) とリスク (Risk) について

一般的に独創性 (独創) とは、模倣によらず自分一人の考えで独特のものをつくりだすことをいう。規則集において、団体の独創性とは 1. そのままの位置での選手間の新しい連携 (フォーメーション) 2. フォーメーションの実施についての新しいやり方 3. 動きの中での選手間の新しい連携 (共同作業) 4. 動きの中での手具使用と選手間の新しい連携となっており、すべて「新しいもの」という条件がついている。何時を基準にこの動きが古いものであるか新しいものであるか、と判断するのは疑問が残るところであるが、この団体種目の組み合わせ (なわとボール) は18年前の第7回世界新体操選手権大会と1991年の第15回世界新体操選手権大会に行なわれており、その時点を基準にして分析した。また、リスクとは一般的に危険、冒険などの意味がある。規則集においては、1.手具を離し手具が空中にある間に難度のない回転要素 (前転など) を2回以上 2.難度と組み合わせて回転要素1回 3.難度要素の直後、視野外で受

けることになっている。これらは団体の構成において6名全員が関与していなければならない、また、実施においてはミスなく正確に行われることでボーナス点（リスク3回で0.2 2回で0.1）が与えられる。各国に独創性とリスクをとりあげ、表5に表した。

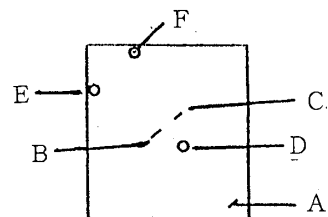
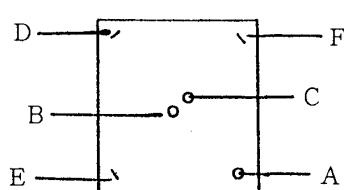
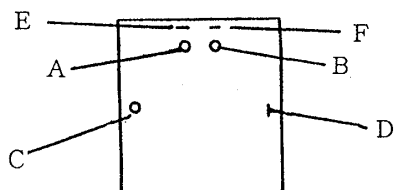
各国の独創性は、規則集における3または4（動きの中での選手間の連携、動きの中での手具使用と選手間の連携）に属するものが多く取り入れられている。ブルガリアのF15とスペインのF12～13は複雑交換の種類であり、手具を次々に相手に渡し、選手全員による共同作業が見られた。

表5 独創性とリスクについて

国名	F	独 創 性	F	リ ス ク
ブル ガ リ ア	F3	一方がなわのリスクを行った直後、相手が投げたボールを足で受け、座位のままなわを床にたたきつけ相手に渡す。	F2	3人がボールを投げ、ジャンプ前転して足で受ける 3人がなわを投げ、ジャンプ前転してなわを受ける
	F15	AとBがCとDにボールを投げ、Dの投げたなわをAとBがジャンプをして受け、前転する。そのなわをEとFがなわを投げながらジャンプ前転して跳び越える。	F13	全員が手具を投げ、もぐり回転1回して受ける
	F18	なわを足にかけ、後方バランスして足となわの間を相手が前後開脚ジャンプでぐりぬける		
ス ペ イ ン	F1	3人のなわの一方を1人が持ち全員で集団のポーズ	F7	交換2
	F10	2人組で背中合わせになり、ボールをはさんで一方が小さくなると共にもう一方がその上をローリングする	F9	交換3
	F12 ～ F13	BとCはEとFにボールを投げなわを受ける AはBとCの間にボールを投げDからきたなわを受ける BとCはAからきたボールをはさんで受ける DはAになわを投げBとCがはさんだボールの上をローリングしてボールを受ける EとFはボールを投げながらDの位置に移動しBとCにボールを投げ、そのボールを足でバウンドさせる。	F15	交換4
	F15	なわを床でバウンドさせ、持ち手の一方を相手がとり、そのなわをもう一方がステップでとぶ		
	F18	2人組になり、なわを相手の首にかけ、持ち手を脚の間からとる		
ロ シ ア	F4	2人組になり、なわを相手の首にかけ、なわの上でボールをころがす	F1 ～ F2	なわボール共に前後開脚ジャンプをしながら投げ、前転1回して座位で受ける
	F7	3人組になり、真中の一人の足になわをかけ、振り子のようにする		
	F9	2人組になり、ボールを投げながらなわをぐりぬけ、ボールを肩で受ける		
	F13	なわでジャンプ後、一方を離し相手が受け、そのなわをステップでお互いに跳び、投げ上げたボールを腰に手を回し受ける。		
	F17	2人がなわを張り、4人が前屈と共に脚を後方に上げながら、なわに膝をかけポーズ		

ブルガリアのF15

スペインのF12～F13



ロシアは、2人組、3人組または6人組でなわを張ったり、振り子のように扱うなど、他には見られないようなものを取り入れていた。ロシアのF17、スペインのF1（スタート）は規則集における1あるいは3の種類に属し、造形美となっている。また、このような独創性の中でスペインのF12～F13のボールをバウンドさせる際のなわ、ロシアのF7の足になわをかけている1人のなわなど、これは手具の静止（0.2の減点）と見られる箇所であった。

リスクについては、ブルガリアは個人技として2回取り入れていた。1人ずつが手具を投げその間にジャンプ前転して受ける、同様に1人ずつが手具を投げ、もぐり回転して受けるというものである。規則集における条件の2に値する。スペインにおいては、3回のリスク全てが交換の中で行なっていた。このリスクには高級難度となるものもあり、F15の交換は中級難度・リスク・独創性と多くの項目を持ち有効な演技である。ブルガリアの個人技のリスクとスペインの交換によるリスクは対照的なものがある。ロシアはスタートの演技（F1～F2）で個人技として1回取り入れているだけで、他にはリスクと判断されるものはなかった。

IV まとめ

1990年に新体操の規則が大幅に改正され、団体の構成における技術的価値と判断されるものに対しボーナス点という項目が加わった。ボーナス点には独創性、リスクの項目がある。独創性とリスクの定義は明確に示されているが、実施された演技を正確にとらえることは難しい。

各国共に構成上数多くの独創性が組み込まれていたことは確かである。リスクにおいては、ブルガリアは2回、スペイン3回、ロシアは1回という結果であった。参考の為、構成の得点はブルガリアが9.8、スペイン9.9、ロシアが9.9という結果が出ている。実際の競技会において、ボーナス点（独創性0.3とリスク0.2）の0.5があるかないかでは大きな違いが出てしまう。特に上位に位置する国においてはこのボーナス点での勝負とも言える。構成点のうち技術的価値としての9.5に関しては、規則集にもあるように要素の数だけでなく多様性や音楽との関係が重要である。それらを含んだ上で、今回の演技分析の中のボーナス点に値する要素を必ず取り入れなければならない。構成の得点における点数の配分に従い、その項目を処理しながら、まず10点満点の構成することが必要である。独創性については、判断の段階で最も主観が入りやすいものと思われるが、感覚でとらえられる独創性ではなく、明らかに過去に行なわれなかった組み合わせや手具の扱いなどを、さらに研究し、リスクにおいては、規則に則った演技を組み合わせ、実施につなげていかなければならない。団体演技の構成をする上で、これらの研究結果を参考にして、より高得点につながる日本の構成をしていく必要がある。

参考文献

日本体操協会「新体操女子規則」1990年版